

イメージの実現—尾鷲市型学校美術館

小学生が居る、中学生が居る、幼稚園の子らも居る!そこに一般市民の方々も入り混じり、それぞれ作品に見入ったり首をかしげたり—なんと新鮮で興味深い光景でしょう。ここ、尾鷲市立中央公民館講堂は、6月17～20日の4日間、三重県立美術館の所蔵品31点が並ぶ「学校美術館」の展示室と化し、市内の小中学校・養護学校・幼稚園の団体や一般市民、計1728名が観覧しました。

学校美術館は、子どもたちに本物の作品に出会ってほしいという願いから始まった三重県立美術館の事業で、展示作品の選定に子どもたちが主体的に関わる点や、全校児童生徒が観覧する機会をもてる点などが大きな特徴です。昨年度他市の小中学校2校の協力を得て別々に試行し、今年度、本格的な実施に臨みましたが、今回の尾鷲市では、市内の小中学校12校が参加、更に後半の二日間は、市民対象の移動美術館とする複合型となりました。これは、より多くの子どもたちと市民が観覧できる機会にしたいという、市教育委員会の方々の発想と熱意に端を発しています。各校に趣旨を伝え参加を呼びかけることは元より、美術館が準備した事前学習用の鑑賞教材〈学校美術館カード〉の貸出・回収、会場の設営・運営等、物理面だけでも、かなりの仕事量だったと思われます。もちろん先生方の理解と協力も不可欠でした。規模の大きな学校では、各学年の観覧時間の割り振りに合わせて移動するのも大仕事です。また公民館から遠い地域の学校は、バス・電車を乗り継いで一日がかりの参加です。それでも、「子どもたちに本物の作品を見せたい、多くの子どもたちに見てほしい」という願いと実現への努力が、「尾鷲市型」を可能にしたと言えます。

前半の二日間、子どもたちの団体は入れ替わり立ち替わりやってきました。汗をぬぐいつつ、美術館職員から鑑賞マナーの話を聴いて展示室へ。ひんやりした会場で、たちまち元気を回復した様子で、二人あるいは数人で鑑賞していきます。職員の案内に耳を傾け、楽しそうに山口長男の油彩《池》を鑑賞している子らもいます。かと思えば二人連れの男性が、低めに展示したエッシャーの版画《物見の塔》の前にしゃがみ、じっくりと覗き込んでいます。「私の耳が片方無いと思ったら、こんなところにあったわ」と、三木富雄の立体《耳》を前に、さりげなくつぶやく女性も来場。別の方からは、「小1の娘が昨日学校から連れてきてもらったんですけど、家で、クレヨンを全部出してきて絵を描いたんです。でも、『こんな色じゃなかった、あの色が出せない』って言うんですよ。『大きな絵をみんな一人で描いてるんだよ』とか、『美術館にも行きたい』って」という話を聞かせていただくことができました。

学校の規模や会場の位置等の諸条件もあり、「尾鷲市型」はあくまで一つの例ではありますが、それぞれの状況に応じて望ましい形を模索してみることが、実は、生き方や文化や未来を創っていくエネルギーになるのでは・・・と思ひ及んだりします。(Se)

